

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02359

研究課題名(和文) 大学英語学習者を対象とした内容言語統合型学習に関する縦断調査

研究課題名(英文) A Longitudinal Study of Content and Language Integrated Learning for Japanese University EFL Learners

研究代表者

西田 理恵子 (Nishida, Rieko)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：90624289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,120,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、CLILやEMIを実施している大阪大学、関西大学、早稲田大学、学習院大学の学部生(合計896名)を対象として、大学英語学習者を対象とした CLILとEMIを導入している大学において、言語運用能力、内発的動機づけ(知識・達成・刺激)、CanDo、可能自己(理想自己・義務自己)、英語学習動機づけがどのように変化するののかについて、量的・質的調査方法を用いて、縦断調査を行なった。結果としてCLILやEMIを通して、学習者の言語面、情意面の両側面が向上する傾向を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究目的を遂行し、教育的枠組みの構築を行い、理論実践的研究の成果を基盤として、国内大学における CLIL、EMIの教育的枠組みの構築を行い、教育実践現場への提言を行うことを可能とした。本研究を通して、研究分野のみならず、教育分野においても、国内における CLIL、EMI の実現可能性を探り、学習者レベルに応じた CLIL や EMI のカリキュラム構想や指導案、教材の開発への提案を可能とし、学習者傾向について主に心理的側面から教育現場へと伝えることが可能となった。実証研究と教育介入とを融合させ、教育実践現場への提言を行うことを可能とした。

研究成果の概要(英文)：The present research reports on a longitudinal study which aimed to investigate possible changes in tertiary students' proficiency, intrinsic motivation (knowledge, accomplishment, stimulation), possible self (ideal L2 self, ought-to L2self), international posture, and perceived language competency based on CLIL (Content and Language Integrated Learning) and EMI (English Medium Instructions). Four different institutes, Osaka University, Kansai University, Gakushuin University and Waseda University, offered CLIL and/or EMI and 896 students participated in the study. The results of this study showed increases in proficiency, motivation and other affective factors in general.

研究分野：外国語教育

キーワード：CLIL EMI 縦断調査 言語運用能力 動機づけ 情意

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

《研究の動向》

近年のグローバル化時代の流れに伴って、文部科学省では、2020年度に向けて「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画に基づいた新たな英語教育の在り方」を検討している。今後、小学校では中学年にも外国語活動が必須化され、グローバル化に対応した英語教育の抜本的充実が計画されている。中学校段階においては、簡単な情報交換や表現ができる能力を養うために授業を英語で行なうことを基本とし、高等学校においては、幅広い話題について抽象的に内容が理解でき、英語話者と流暢にやりとりができる能力を養うことや授業を英語で行うことが計画され、言語活動を活発に行なっていくことができるよう発表、討論、交渉等の充実が検討されていた。小・中・高等学校における各段階を通して学習者の英語運用能力を向上させること、高等学校卒業時点での英語運用能力が英検 2 級～準 1 級、TOEFLiBT57 点以上の運用能力が求められている。新たな英語教育が抜本的充実を図ることができるよう、大学英語教育においてもより高度な英語教育を基盤とした教育改革が考えられ、その一環として国内外で注目を集めている外国語教育の教授法が内容言語統合型学習(CLIL)や EMI (English as Medium Instruction : 英語による一般教養教科及び専門科目)がある。今後の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を見据え、日本国内の大学英語教育においては、より高度な教授法を取り入れることは言語教育全体の抜本的改革の基盤となりうると考えられるため、本研究課題は国内の英語教育にとって、極めて重要な課題と考えられた。

2. 研究の目的

大学英語学習者を対象とした CLIL と EMI を導入している大学(大阪大学、早稲田大学、学習院大学、関西大学)において、言語運用能力、内発的動機づけ(知識・達成・刺激) CanDo、可能自己(理想自己・義務自己)、英語学習動機づけがどのように変化するのかについて、縦断調査を行なう。量的研究法・質的研究法を用いて、CLIL や EMI の教育的効果や問題点について明らかにし、英語教育現場における内容・言語・情意の関わりについて実証研究を通して包括的に捉えることを目的としている。

3. 研究の方法

2017年～2022年にかけてデータ収集は、大阪大学、関西大学、早稲田大学、学習院大学で調査を実施している。CLIL と EMI の取り組みは、各大学によってカリキュラム構想が異なる為、CLIL、EMI の教育介入の事前・事後、あるいは中間時において英語運用能力テストと質問紙を実施し、縦断的比較を実施する 3 年間の調査期間を設け、教育介入後においては、質的データ収集も実施し、学生に対する自由記述や非線形モデルとして知られる Motigraph を行った。

《調査対象者》大阪大学、関西大学、早稲田大学、学習院大学に在籍中の大学英語学習者(学部生 1 年生～4 年生)を調査対象者とする。言語運用能力と質問紙を教育的介入の事前と事後の 2 度実施するために、約 600 名～約 700 名を調査予定としていたが、最終的に調査実施期間中に調査対象者となった総数は 896 名であった。内訳は、大阪大学(692 名)、学習院大学(105 名)、関西大学(54 名)、早稲田大学(45 名)であった。言語運用能力については CASEC を実施し、教育介入前後における変化の傾向を捉えている。質問紙には、動機づけ(知識・達成・刺激)、可能自己(理想自己・義務自己・学習経験)、CanDo (Speaking, Listening, Reading, Writing)、コミ

ユニケーションへの積極性、各大学の CLIL や EMI の実施状況によって質問紙調査を行っている。CASEC を実施した所属機関は大阪大学、早稲田大学、学習院大学の 3 大学であり、質問紙を実施した所属機関は大阪大学、早稲田大学、関西大学、学習院大学の 4 大学であった。

4. 研究成果

《大阪大学》大阪大学での授業では、内容言語統合型学習方法(CLIL)を基盤として、Content (内容), Cognition (思考), Communication (言語), Community (協学)を有機的に繋いで講義が行われた。講義では、教科内容を取り入れて英語の習得を目指し、地球市民としてグローバルな視点で批判的考察を行うライティング活動や CLIL リサーチプロジェクトを中間と期末に実施し、プレゼンテーションを行うことが求められた。授業では、内容理解に重点を置きながら、パラグラフの構成、論理の展開など読みに必要な事項を認識し、リーディング力を養成する、内容と言語に重点を置いて講義が行われた。教室内では教科書に加えて、オーセンティックな教材(インターネット、雑誌等)を使用して更なる理解を深めることが求められた。講義内容には、基礎工学部や工学部では「Biological engineering」「Space engineering」「Robot technology」「Special topics in engineering」などが含まれた。また人文学系のシラバスには人文学系の内容が取り扱われていた。

調査実施期間は、2017 年～2018 年後期 (165 名)、2018 年～2019 年前期・後期 (249 名)、2019 年～2020 年前期・後期 (278 名) であり、692 名が調査対象者となった。そのうち、言語運用力テスト(CASEC)を受講した調査対象者は 414 名 (2017 年～2018 年、2018 年～2019 年) であった。言語運用力テストは、授業を受け始めた初期段階と最終段階の 2 回であり、質問紙調査を第 1 週目、第 8 週目、第 15 週目の 3 回行っている。また学習者の変化の傾向を捉えるために、回顧的手法を用いた Motigraph (Motivation Graph)を実施し、学習者の 15 週間の変化の傾向を質的に捉えている。分析には SPSS ver.24 を使用し、言語運用能力テストには反復測定 t テストを実施した。CASEC の結果については、2017 年～2018 年($n=165$) (Time 1: $M=625.58$, Time2: $M=632.72$), 2018 年～2019 年($n=249$) (Time 1: $M=621.17$, Time2: $M=625.41$) であり、全体傾向としては初期の段階と最終段階では上昇する傾向にあったが、反復測定 t 検定では有意差を認めなかった。質問紙調査には、反復測定分散分析を実施して、分析を行った。分析は、年度ごとに分けて実施している。質問紙の項目には、内発的動機づけ(刺激・達成・知識)、可能自己(理想自己・可能自己)、努力、CanDo (reading, listening, writing, speaking)、英語学習動機づけの調査が行われた。図 1 は、2018 年～2019 年度に測定された 249 名の調査結果であり、情意については、全体として上昇傾向にあり、反復測定分散分析では、内発的動機づけや CanDo に統計的な有意差を認めている。同様の結果が、2017 年～2018 年、2019 年～2020 年度にも確認された。Motigraph については、2017 年後期 ($n=38$)、2018 年～2019 年前期後期 ($n=128$)においてデータ収集を行っており、図 2 (2018 年～2019 年)に示すような変化の傾向を認めた。2017 年後期にも同様の結果が見られ、動機づけの上下を繰り返しながら上昇する傾向を捉えている。この Motigraph については、学生の回答の全てを定量化し、平均値をグラフ化している。2018 年～2019 年度に得られた学習者の自由記述 (206 記述) をコード化したところ「内容」「努力」「他者との関係性」「自律性」「喜び」の 5 つのカテゴリーが抽出された。(1) 「内容」: CLIL リサーチプロジェクト (54%), 内容学習(5%), 様々なリソースから得た知識 (5%), (2) 「努力」: 英語力の向上(10%), 言語テストへの積極的な参加(1%), (3) 「良好な関係性」: クラスメイトとの良好な関係性の構築(18%), クラスメイトとの積極的な議論 (5%) (4) 「自律性」; 自発的な参加 (2%), (5) 「喜び」: 学習への喜び (1%)が確認された。「内容」学習に関する記述の中でも、CLIL リサーチプロジェクトに関する肯定的な内容が多く含まれた

(例：“プレゼンテーションが楽しかった”“プロジェクトから教科内容を学ぶことができた”)

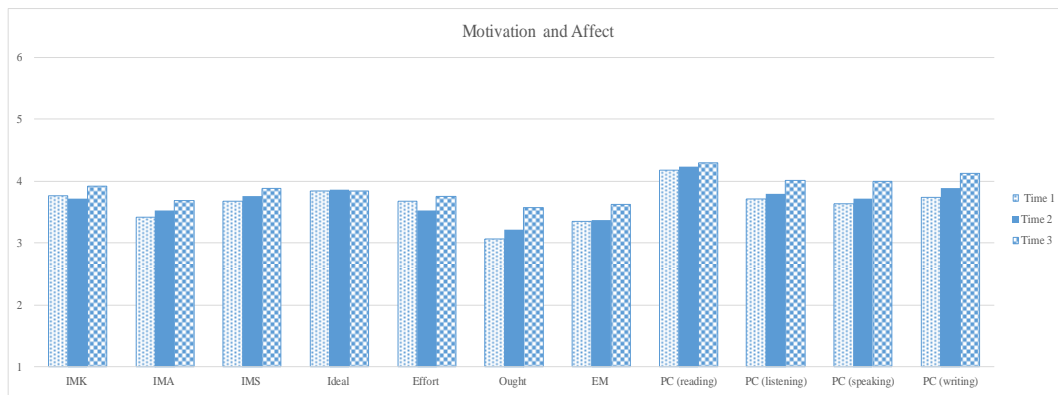


図 1. 2018 年～2019 年にかけての動機づけと情意の変化(n=249)

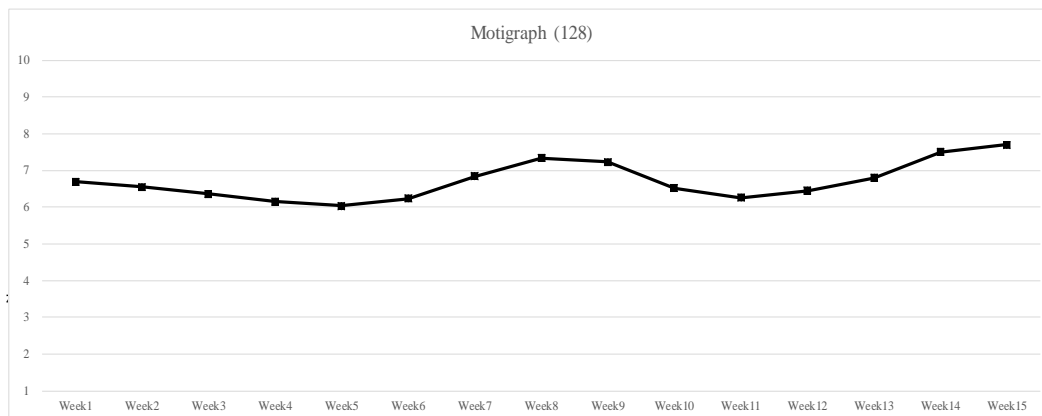


図 2. 2018 年～2019 年 Motigraph (n=128)

《早稲田大学》早稲田大学では CLIL・EMI の授業において 49 名の受講者を対象に CASEC と質問紙調査を実施した。調査対象者は、授業を受け始めた初期段階と最終段階の 2 回に分けて CASEC と質問紙を受けている。質問紙の項目には、英語学習に対する内発的動機づけ・外発的動機づけ・英語使用者としての理想自己・英語使用時における自己評価、学術内容学習に対する内発的動機づけ・外発的動機づけ・専門分野の知識人としての理想自己が測定された。CLIL の教育実践が行われ、EMI では「第二言語習得論入門」「異文化コミュニケーション」「多元文化論系演習」の教育実践が行われた。EMI 授業の「第二言語習得論入門」での内容学習は、例えば、第二言語習得理論、臨界期仮説、バイリンガリズム、バイリンガルと脳、年齢と習得、個人差要因などに関する内容学習が行われた。言語運用能力については、45 名が CASEC を受けた。初期段階 ($M=695.44$) 最終段階 ($M=702.04$) となり上昇傾向にはあるものの、反復測定 t 検定では統計的な有意差は見られなかった。質問紙については、49 名の受講者が調査対象者となっているが、英語学習に対する内発的動機づけや英語使用者としての理想自己については若干の低下は見られるものの高い数値を示していた。また英語学習に対する外発的動機づけ(同一視調整)についても高い状態のまま維持した傾向にある。英語学習に対する外発的動機づけの中で、外的調整や無動機については、非常に低い数値のまま維持された。英語使用に対する努力についても 1 学期間を通して維持する傾向を示している。さらに、英語に対する自己評価についても維持する傾向が示された。学術内容学習に関する質問項目については、学術内容学習に対する内発的動機づけや外発的動機づけ(同一視調整)は若干の低下がみられるものの、1 学期間を通して高い数値を示していた。専門分野の知識人としての理想自己については若干ではあるものの上昇する傾向にあった。

《学習院大学》学習院大学国際社会科学部では、世界的に活躍できるビジネスパーソンの育成を目的として英語で専門科目を学ぶことにより、社会科学領域において、4年間全体を通して英語教育と専門科目教育の距離が段階的に縮められるように設計されている。1年時には社会科学部における入門講義科目である（経済学、社会学、ビジネス、法学、地域研究）の専門科目を日本語で受講すると同時に EAP (English as Academic Purposes) の英語教育によって4技能教科とプレゼンテーション科目を受講する。2年次は EMI が開講され、社会系と経済系の選択講義科目が英語で実施され、CLIL 科目も配置されている。3年次4年次には多くの科目が専門講義科目 (EMI) となり、語学科目の必須はなくなり英語は選択科目として受講している。

学習院大学での調査概要は、105名を対象に、1年次修了時 (CLIL・EMI 履修前) と2年次修了 (CLIL・EMI 履修後) における CASEC と質問紙による比較である。対象者は、必修アカデミック英語 (年間12単位) と社会科学系選択導入講義科目 (年間8~10単位程度) を1年次に履修した。2年次第一学期には2つの異なる必修 CLIL 科目 (経済系、国際開発系) を履修し、第二学期には、5 CLIL (ビジネス 国際紛争 メディア 多様性 国際問題) 科目の中から本人が希望する2科目を選択し履修した。またこの他に、多くの学生は EMI 講義科目を年間8~10単位程度履修した。データ収集は、1年次修了時 (2017年12月) と2年次修了時 (2018年12月~2019年1月) に行った。また、質的データとして、質問紙において、同意を示した対象者の中から CASEC の伸びが顕著であった6名に対し1年次 (EAP) と2年次 (CLIL) の違いに関して面接を行った。結果として量的調査は、105名 (M 37, F68) のデータが分析対象となった。言語運用能力では合計点及び、Section 4 (intensive listening) 以外のセクションで反復測定t検定によって有意な伸びが確認された。質問紙調査については、動機づけ、自律性、国際的志向性は低下が見られ、言語能力の伸びとの差が浮き彫りになったが、自律性 (Reflection)、コミュニケーションへの積極性については上昇が見られた。

《関西大学》関西大学では EMI 「Culture and Communication」を開講し、2名の教員が2クラスを第1週目から第7週目、第8週目から第15週目を交互に担当していた。本授業の目的は文化心理学と異文化理解に関する理解を深めることにあり、講義内容には「Communication」「Communication and cultural learning」「Culture (cross-cultural comparison, globalization and culture)」「Verbal communication (language and culture, communication styles, language and power)」「Culture and context」等が含まれていた。調査実施時期は、2018年4月と2018年7月 (学期の初期段階と後期段階) 授業を受け始めた初期段階と最終段階であり、2回に分けて質問紙調査を行った。調査対象者は54名であった。内発的動機づけ (知識・刺激・達成)、国際的志向性、可能自己 (理想自己・義務自己)、努力、英語学習動機づけ、内容に関する動機づけ、EMI 動機づけが測定された。結果として、EMI 動機づけ以外の全ての要因において、4月と7月を比較したところ、7月時点で上昇が見られた。特に、統計的な有意差を示した項目は、内発的動機づけ (知識・達成) であった。

《おわりに》本研究結果の結果から、肯定的な変化が見られたことにより、国内大学における CLIL、EMI の実現は有益であることが示された。学習者レベルに応じた内容や言語を取り扱い CLIL や EMI のカリキュラム構想やシラバス開発をすることは可能であり、CLIL や EMI の実践を通して学習者の言語運用能力の向上や情意面を高める環境を作り出せる可能性が考えられる。今後の発展的研究としては、対象群を用いて、CLIL vs. Non-CLIL (EFL) のような実験研究が期待されよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 10件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Rieko Nishida	4. 巻 23
2. 論文標題 Motivating university students in CLIL in the Japanese context: longitudinal perspectives.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Kansai JACET Journal	6. 最初と最後の頁 118-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 2
2. 論文標題 内容と言語に関わる実証研究：国内外の研究を通して。	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト2021	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayasaki, A., & Ryan, S.	4. 巻 45
2. 論文標題 A Different Kind of Tension: Foreign Language Anxiety from a Positive Psychology Perspective.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Chinese Journal of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/CJAL-2022-0103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ryan, S., & Liu, H.	4. 巻 45
2. 論文標題 Introducing Positive Psychology in Applied Linguistics: Asian Perspectives.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Chinese Journal of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/CJAL-2022-0101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kyle Read Talbot, Marie-Theres Gruber and Rieko Nishida	4. 巻 1
2. 論文標題 Introduction to the special issue; The psychology of teaching and learning content and language. Journal of the psychology of Language Learning.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Special Issue: The Psychology of Teaching and Learning Content and Language. Journal of the psychology of Language Learning.	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 1
2. 論文標題 動機づけ研究の過去、現在、そして未来に向かって：研究の動向と研究方法論の視座から．応用言語学における理論と実践 研究と教育を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト2020.	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Stephen Ryan	4. 巻 -
2. 論文標題 Individual differences and motivation.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Palgrave handbook of motivation for language learning. Palgrave Macmillan.	6. 最初と最後の頁 163-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Stephen Ryan	4. 巻 -
2. 論文標題 Language learner motivation: What motivates motivation researchers?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Cambridge handbook of language learning.	6. 最初と最後の頁 409-429
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ryan, S. & Irie, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Learning across generations: a small-scale initiative.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Innovation in Language Teaching and Learning The Case of Japan. Palgrave Macmillan.	6. 最初と最後の頁 97-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ryan S., Nakamura S., Reinders H.	4. 巻 -
2. 論文標題 Innovation in Japan: looking to the future.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Innovation in Language Teaching and Learning The Case of Japan. Palgrave Macmillan.	6. 最初と最後の頁 283-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Reinders H., Nakamura S., Ryan S.	4. 巻 -
2. 論文標題 The scope of innovation in Japanese language education.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Innovation in Language Teaching and Learning The Case of Japan. Palgrave Macmillan.	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kay Irie	4. 巻 60
2. 論文標題 Report on EMI, CLIL, and bridging programmes in higher education in Asia: application and practice. Chapter 1. Introduction.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『調査研究報告』学習院大学東洋文化研究所	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kay Irie, & Reiko Fujita	4. 巻 60
2. 論文標題 Report on EMI, CLIL, and bridging programmes in Higher Education in Asia: application and practice. Chapter 5: In the case of Taiwan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『調査研究報告』学習院大学東洋文化研究所	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 2月号
2. 論文標題 English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes. (Eds). A. Bradford & H. Brown. (2018). Multilingual Matters: Bristol. 海外新刊書紹介.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育、大修館書店	6. 最初と最後の頁 85-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 8月号
2. 論文標題 Language Teacher Psychology. (Eds) Sarah Mercer and Achilleas Kostoulas (2018). Multilingual Matters: Bristol. 海外新刊書紹介.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育、大修館書店	6. 最初と最後の頁 95-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rieko Nishida	4. 巻 1
2. 論文標題 The integration of content in the language classroom to enhance students' motivation in language learning.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪大学大学院言語文化研究科プロジェクト	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kay Irie	4. 巻 -
2. 論文標題 An insider 's view: launching a University program	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Innovation in Language Teaching and Learning The Case of Japan	6. 最初と最後の頁 211-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 2017年度
2. 論文標題 大学英語学習者における内容と言語の融合：CBI, CLIL, EMIの可能性を探って	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪大学大学院言語文化研究科プロジェクト・新しい英語教育のアプローチ	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田理恵子	4. 巻 6月号
2. 論文標題 日本人英語学習者の時間の経過に伴う動機づけと情意の変化：教育と研究の視点から。	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育・大修館書店。	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Irie, K., Ryan, S., & Mercer, S.	4. 巻 8
2. 論文標題 Using Q methodology to investigate pre-service EFL teachers ' mindsets about teaching competences.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SLLT	6. 最初と最後の頁 575-598
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入江恵	4. 巻 6月号
2. 論文標題 社会科学と英語の融合目指して：学習意欲の維持を意識した学部カリキュラム構築	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育・大修館書店.	6. 最初と最後の頁 14-16.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 八島智子	4. 巻 6月号
2. 論文標題 コミュニケーションに向かう態度を育てる：WTC (Willingness to Communicate)研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育・大修館書店.	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Stephen Ryan	4. 巻 6月号
2. 論文標題 Turning the tables: Language learner motivation in a people-centered classroom	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育・大修館書店.	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 マキュワン麻哉	4. 巻 6月号
2. 論文標題 「自己 (self)」に関する志向の研究とその概念	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育・大修館書店.	6. 最初と最後の頁 24 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Yashima, Rieko Nishida, R., Atsushi Mizumoto.	4. 巻 101
2. 論文標題 Influence of Learner Beliefs and Gender on the Motivating Power of L2 Selves.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Modern Language Journal	6. 最初と最後の頁 691-711
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Rieko Nishida, Tomoko Yashima	4. 巻 28
2. 論文標題 Language proficiency, motivation and affect among Japanese University EFL learners focusing on early language learning.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件 (うち招待講演 19件 / うち国際学会 18件)

1. 発表者名 Rieko Nishdia
2. 発表標題 Enhancing Japanese students' motivation and language proficiency in CLIL in a longitudinal study.
3. 学会等名 56th RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 大学英語学習者を対象とした内容言語統合型学習に関する縦断調査
3. 学会等名 基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Irie Kay
2. 発表標題 Curriculum in progress: 6 years after implementation
3. 学会等名 基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 Five years: Looking back and looking forward
3. 学会等名 基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 A person-centred approach: What it means and why it matters
3. 学会等名 KoTESOL 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 Learning from older language learners
3. 学会等名 KoTESOL 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 English and Internationalisation in Asia
3. 学会等名 ExcitELT (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kay Irie
2. 発表標題 Connecting English-as-the-medium-of-instruction (EMI), L2 self-concept, and study abroad.
3. 学会等名 Internationalisation: Optimising Student Experience (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Maya Sugita-McEown & Kristopher McEown
2. 発表標題 Self-regulatory processes among Japanese EFL learners in CLIL course contexts
3. 学会等名 3rd international conference on Situating Strategy Use (SSU) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 Soft-CLILを通じた動機づけの縦断的变化
3. 学会等名 動機づけ研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 大学英語学習者における言語運用能力と動機づけに関する縦断調査
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部始子 [1] 湯川笑子 [2] 西田理恵子 [3] 酒井秀樹 [4]
2. 発表標題 実践報告の準備と発表の仕方 (ワークショップ)
3. 学会等名 小学校英語教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rieko Nishida
2. 発表標題 Enhancement of Students' Self-efficacy in Content and Language Learning in the Japanese EFL Context.
3. 学会等名 Language in Focus (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rieko Nishida
2. 発表標題 Enhancement of Japanese university EFL learners' motivation and affect to explore their global perspectives in content and language learning.
3. 学会等名 University of Munch. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rieko Nishida
2. 発表標題 Content and Language Integration in the Language Classroom in the Japanese University EFL Context.
3. 学会等名 Hawaiian International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rieko Nishida
2. 発表標題 The psychology of CLIL and EMI: A comparative study of Spain, Austria, Japan and U.S.A. Psychology of Language Learning. I
3. 学会等名 Psychology of Language Learning (PLL3) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 時間軸を取り入れた動機づけの変化
3. 学会等名 動機づけ研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 大学英語教育における動機づけ研究と教育実践：内容と言語を融合して．島根大学
3. 学会等名 島根大学教育センター (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 大学英語学習者を対象とした内容言語統合型学習に関する縦断調査
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kay Irie
2. 発表標題 Innovation behind the scenes: Challenges and opportunities for universities in Japan.
3. 学会等名 25th Anniversary CUE Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kay Irie
2. 発表標題 Transition or integration? EAP, CLIL, and EMI.
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 マキユワン麻哉
2. 発表標題 大学英語学習者を対象とした内容言語統合型学習に関する縦断調査
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 What am I teaching... and why? ... the EMI challenge.
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Stephen Ryan.
2. 発表標題 Where there 's well-being ... there will be learning.
3. 学会等名 ELTOC Global Webina (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 Feeding back ... and forward: The long-term benefits of effective feedback
3. 学会等名 Korea Oxford Day 2018. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 Motivation in English language learning
3. 学会等名 NUFS Workshop, Nagoya University of Foreign Studies (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 Language learner motivation: Where are we now?
3. 学会等名 TALK 2018, Waseda University, Tokyo (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rieko Nishida
2. 発表標題 The psychology of content and language learning in the Japanese EFL context.
3. 学会等名 Focus on Language (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Quint Oga-Baldwin, Rieko Nishida
2. 発表標題 What motivates learners in content-integrated courses? Measuring the psychology of CLIL and EMI.
3. 学会等名 The Applied Linguistics Association of New Zealand (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西田理恵子 [1] . 廣森友人 [2] . 阿川敏恵 [3] . 小島直子 [4] .
2. 発表標題 日本人英語学習者における動機づけと情意に関する縦断的变化に関する実証研究.
3. 学会等名 外国語教育メディア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西田理恵子
2. 発表標題 大学英語学習者における動機づけ：内容と言語を融合して
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kay Irie
2. 発表標題 CLIL as a bridge to EMI: Autonomy-fostering
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Stephen Ryan
2. 発表標題 L2 learner motivation: The CLIL challenge
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八島智子
2. 発表標題 日本におけるL2を用いたコンテンツ教育の可能性：Immersion, CLIL, EMI
3. 学会等名 科学研究費助成金基盤研究B企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 八島智子
2 . 発表標題 L2 Motivation and willingness to communicate in a globalizing world
3 . 学会等名 Okinawa JALT, 2017 at Okinawa Christian University, (招待講演)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Irie Kay
2 . 発表標題 CLIL as a Bridge to EMI: Challenges and Opportunities. Presented March 13 at 53rd RELC International Conference on 50 Years of English Language Teaching and Assessment - Reflections, Insights and Possibilities,
3 . 学会等名 SEAMEO Regional Language Centre, Singapore. (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Irie, Kay., MacGregor, L., Marchand, T., & O'Neill, T.
2 . 発表標題 Forum presented 19 November at JALT2017
3 . 学会等名 43rd Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition of the Japan Association for Language Teaching, Tsukuba, Ibaraki. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Irie Kay
2 . 発表標題 Removing Ranking Values: Lessons from a pilot study.
3 . 学会等名 Poster presented on 7th September at the 33rd Annual Conference for the Scientific Study of Subjectivity held at 200SVS, Glasgow. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1. 発表者名 Irie, Kay., MacGregor, L., Marchand, T., & O'Neill, T.
2. 発表標題 Implementing CLIL in the Faculty of International Social Sciences at Gakushuin University (English)
3. 学会等名 Japan CLIL Pedagogy Association (J-CLIL) (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 西田理恵子 (編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 動機づけ理論に基づく英語指導	

1. 著者名 入江恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 11
3. 書名 第4章. 自律学習者を育てる大学カリキュラムを目指して-CLILからEMIへ『動機づけ理論に基づく英語指導』	

1. 著者名 マキュワン麻哉・ライアンステファン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 10
3. 書名 第4章. EMIを通じた「やる気」の変化『動機づけ理論に基づく英語指導』	

1. 著者名 西田理恵子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 72
3. 書名 第1章. 動機づけの先行研究『動機づけ理論に基づく英語指導』	

1. 著者名 西田理恵子・マキュワン麻哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 15
3. 書名 第2章. 動機づけに効果的な指導法『動機づけ理論に基づく英語指導』	

1. 著者名 西田理恵子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 10
3. 書名 第3章. CLILの実践を通して大学生を動機づける仕掛け『動機づけ理論に基づく英語指導』	

1. 著者名 Kyle Read Talbot, Marie-Theres Gruber and Rieko Nishida	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Multilingual Matters	5. 総ページ数 301
3. 書名 The Psychological Experience of Integrating Content and Language	

1. 著者名 Rieko Nishida	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Multilingual Matters	5. 総ページ数 15
3. 書名 Chapter 14. A longitudinal study of Japanese tertiary students' motivation, perceived competency, and classroom dynamics	

1. 著者名 Lamb, M., Csizer, K., Henry, A. & Ryan, S.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 697
3. 書名 Palgrave handbook of motivation for language learning.	

1. 著者名 Reinders, H., Ryan, S., & Nakamura, S.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 295
3. 書名 Innovation in English Education in Japan.	

1. 著者名 Stephen Ryan	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge University Press.	5. 総ページ数 55-68
3. 書名 Motivation. In Richards, J. & Burns, A. (eds.). Cambridge Guide to Learning English as a Second Language	

1. 著者名 西田理恵子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 26-38
3. 書名 英語教育徹底リフレッシュ：グローバル化と21世紀型教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>科学研究費助成金基盤研究Bのホームページ https://rienishi.jimdo.com/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	マキユワン 麻哉 (McEown Maya) (00757354)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	RYAN STEPHEN (Ryan Stephen) (30327225)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	入江 恵 (Irie Kay) (30406863)	学習院大学・国際社会科学部・教授 (32606)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	八島 智子 (Yashima Tomoko) (60210233)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	
研究 分 担 者	オオガポールドウィン クイント (Quint Oga-Baldwin) (20536304)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
KAKEN Symposia and Special Talk (March, 2022)	2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関